

母のふところ

【聖書】詩編22編10～12節

わたしを母の胎から取り出し その乳房にゆだねてくださったのはあなたです。母がわたしをみごもったときから わたしはあなたにすがってきました。母の胎にあるときから、あなたはわたしの神。わたしを遠く離れないでください 苦難が近づき、助けてくれる者はいないのです。

[序]母の日の由来

今日は**母の日**ですので、ヨハネの黙示録を離れて、み言葉をお取次ぎさせていただきます。5月の第二日曜日にカーネーションを贈って母に感謝を表す母の日は、**1907年**アメリカの西バージニア州の或る教会で行われた記念会が起源だそうです。**アンナ・ジャーヴィス**さんの母は、その教会で26年間日曜学校の先生の奉仕を続けました。アンナさんも母のクラスの生徒でした。

ある日のこと「あなたの父と母を敬え」という聖書の言葉を学んだ時に、アンナのお母さんは、子どもに対する母の愛と苦勞を語った後で、「母の愛に感謝を表すにはどうしたらよいでしょうか」と問いかけたそうです。アンナはその時から、「**母に感謝する方法**」という宿題を心に暖め続けるようになりました。母が召されて2年後、彼女が43才の時、母が奉仕を続けた教会で**母の記念会**を催し、母が好きだったカーネーションの花を集まった皆さんに贈るといふ感謝の表し方をしました。

アンナの挨拶の言葉を聞いて教会員たちは感動し、皆で毎年一緒に自分たちの母への感謝を表す会を開くことになりました。するそれが他の教会や町に伝わり、感謝会が広まり始めました。デパート王ワナメーカーも日曜学校の校長を長く勤めてきた信者なので、自分のデパートでも母に感謝する集会を開き始めました。こうして米国各地に広まり、**1914年**ウイルソン大統領が5月第2日曜を母の日にする文書に署名、米国から世界に広まったのだそうです。日本にも大正時代初期に伝わりました。

[1]母のふところ

神さまは人間を男と女にお創りになり、二人が一つに結ばれて子どもを産み、育てるようになさいました。子どもは**父と母の愛**の中で、神さまの愛を表わす人格へと育つようにお考えになったのです。では父親と違う母親の役割りは何でしょうか。

母親の役割りの特色はふところにあります。今日の聖書、詩編22:10「わたしを母の胎から取り出し その乳房にゆだねてくださったのはあなたです」は、口語訳では「しかし、あなたはわたしを生まれさせ、**母のふところにわたしを安らかに守られたかたです**」と訳されています。神さまは、乳飲み子が皆、母のふところに優しく抱かれ、乳を与えられて育つようになさいました。

詩編131:2でも「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を幼子のように、母の胸にいる幼子のよ

うにします」。口語訳では「かえって乳離れしたみどり子が、その母のふところに安らかあるように、わたしは我が魂を静め、かつ安らかにしました」と歌われています。神さまは私たちを先ず母のふところで育てることによって、神のふところに生きる者が、どんなに魂に安らぎを与えられるものなのかを、悟らせようとされたのです。

子どもたちはその母のふところの中で、**魂の平安と信頼感**を養われ、**情緒が安定**していきます。そしてこの情緒の安定が、穏やかで心の広い人格形成の土台になっていきます。神さまへの深い信頼感が養われていけば、大きくなって厳しい困難の中に立たされた時にも、あるいは成功して傲慢に陥りそうになった時にも、幼子の心を取り戻して、**神さまのご指示**を仰ごうと祈ることが出来ます。これは大人にとっても、とても**必要なこと**ではないでしょうか。

フランスの小説家T. ボヴェーがこう言っています。「母は、何かをし、何かを言うよりも、**そこにいるだけで**、十分役割を果たしている」。「神に全幅の信頼を寄せることが出来るということを我が子に与えた母は、彼女の**人生の役割**を全うしている」。

主イエスは「**憐れみ深い人は幸いである**」とおっしゃいました。この**憐れみ**はヘブル語では**子宮・胎の複数形ラハミーム**という語が使われています。ユダヤ人は憐れみ深い人を「**子宮を幾つも持っている人**」と表現したのです。人間の体内には沢山の臓器があり、その働きによって自分の命が養われ、守られています。「しかしただ一つ、自分の命ではなく、**他の命を養い育てる臓器**がある——それが女性にのみ備えられている**子宮**です」という解説を読みました。

私たちは口から食べ物を取り入れ、胃袋で消化し、腸から血液を通して栄養素を体内に送り出します。肺で呼吸し、心臓で血液を体中に循環させます。その他にも沢山の臓器がありますが、どれも皆、順調に働かなければ、私たちの命は保たれません。全ては自分の命のために働いてくれる臓器です。しかし子宮(胎)だけは違う。自分の命ではなくて他の人間の命を育てるために働いている臓器なのです。

更に私の心を惹いたのは「**どんな命でも選り好みしないで受け入れる**」という言葉です。誰でも「このような子どもを持ちたい」という願望を持っています。でも**母の胎**は命を宿す時に入学試験をしません。将来どんな人になるか全く見当がつかないまま、**無条件で受け容れ**、10ヶ月間抱き続け、自分の血と肉と命までも分け与えるのです。まさに**慈悲そのものを表わす素晴らしい臓器**なのですね。

そして生まれてからも、命が育っていくには、長い年月にわたる**世話**が必要なのです。何一つ出来ない赤ん坊を忍耐強く育てて行く**原動力が愛**です。その愛を神さまは先ず**母性に備え**、命を託されたのでした。私たちが母性に惹かれるのは、まさに**憐れみ**そのものの働きをする母の胎内で育てられたからなのですね。神の創造の業の神秘さに、頭が下がります。

[2]神に選ばれた子

曾野綾子の小説「神の汚れた手」に、産婦人科の医者から、誰も引き取らない赤ん坊を養子にしたトーマスさんの話が出てきます。二人の会話をご紹介します。

「日本人が誰ひとりとして貰わない子を、どうして貰ってくれるのですか」「それは簡単です。私がおその赤ちゃんに**選ばれた**からです。私はその赤ちゃんのそばに住んでいました。その赤ちゃんが生まれた時、先生は私のことを思い出してくれました。**偶然**と人は言うかもしれませんが、偶然ではないのです。**神さま**がそうして下さいなのです。」

「しかしトーマスさん。日本人はそういう時に、決まって**素質**ということを言いますよ。素質のいい子なら欲しいけれど、そうでないのならいらぬという感じでね。秀才になりそうな男の子、美人で気立てのいい女の子ならいい。」

「先生、それは少し違います。もしもそれが果物や野菜なら、私も品物を選びます。虫の食ったリンゴや、くさったジャガイモ、これはよくないです。しかし**人間は品物ではない**。リンゴやジャガイモと比べることは出来ません。人間はもっともっと**大切なもの**でしょう。日本人は子どもを**お宝**と言うじゃないですか。私たちはお宝を貰うのです。頭を下げて**宜しく**と言うほかはないですね」

皆さんはこの会話を読んで、どうお感じになりますか。「**子どもは親が選んで決めるものではない**。それでは**品物扱い**になる。**人間はもっともっと大切なもの**でしょう」というトーマスさんの言葉は、本当に重い言葉ではないでしょうか。人間は、私たちが**自分の好み**で選ぶことを許さないほど、貴くて大切なものなのですね。私たちの判断ではなく、**神さま**が深い**真実の愛**をもってお決め下さった子どもだからこそ、間違いなく**恵み**なのではないでしょうか。

ですから我が子に対して「自分が選ぶとしたら、こんな子は選ばなかった」と思うようなことがあったら、「だからこの子は**神さま**がお決めになった子なのだ」と受けとめる信仰を持ちたいものです。

[3]赤ん坊の叫び

2才から3才の子を持つ母親6000人の調査で、**子育ては辛い**:90%、子どもが可愛いと思えないことがある:80%とあったそうです。結婚前に保育士をしていた2才の男の子の母親の言葉を読みました。「子どもをぶつならお尻より下をと決めていた。そのうちに頬や頭をぶち、蹴ったこともある。私自身子どもを少しずつ**嫌い**になり始めていたのが怖かった。」

自分の体の中にある「**憐れみ深さ**」そのものの働きをする子宮(胎)に、選り好みしないで受け入れ、自分の血や肉を与えながら10ヶ月間抱き続けて生み出した子どもなのに、殴ったり蹴ったりするのは一体どうしたことでしょうか。それは母胎という臓器自体が自然にそのように働いてくれたからであって、**母親自身の心の営み**ではなかったからにほかなりません。ですから、子どもを生み育てているから、当然**母性が備わっているはずだ**ということにはならないのですね。

ですから母親は、我が子を養いそだてていくに当たって、先ず自分の内に**母性を養いそだてていく**必要があります。母性とは「自分の血と肉を分け与えて養いそだてていく」ことだけではありません。どんな命でも**選り好みしないで抱き続ける**ことも、**母性の大切な特徴**なのです。子どもを養育する女性は、たとえ自分が生んだ子どもでなくても、母性のこの特徴をよく自覚して**養育**に当たってもらいたいものです。

どうして我が子が嫌いになり始めるのでしょうか。自分の思うような子になってくれないからでしょう。その時に「子どもは**親が選んで決めるものではない**。それでは品物扱いになる。人間はもっともつと**大切なもの**でしょう」というトーマスさんの言葉を思い出してもらいたいものです。自分が入学試験をしてこの子を自分の胎内に宿したのではないことを、思い出して下さい。

母は子を選べません。それ以上に**子も母を選べない**のです。ではどうしてこの子が**私の子**になったのでしょうか。どうして私が**この子の母**になったのでしょうか。今日の聖書の言葉をお読み下さい。

「母の胎にあるときから、**あなたはわたしの神**」。神さまがこの母の胎内に私をお入れになったのです。「わたしを母の胎から取り出し、その乳房にゆだねてくださったのは**あなた**です」。神さまがこの母の乳房を私にお与えになったのです。親子の絆は、**神さまがお決めになった**という信仰が言い表わされています。

その神さまは、イエス・キリストを十字架につけてまでして、罪深いこの私を救って下さるほどに、私を愛してくださっている**あなた**なのです。この**愛の神さま**が深い**真実の愛**をもって母と子の絆をお決めになったのです。慈しみをもって子育てするには、**愛の神さまを心から信じる信仰**が必要です。神さまの愛に全幅の信頼を寄せる時に、自分の思い通りにならない子どもでも、神さまから頂いた**恵み**として受け容れることができるのではないのでしょうか。

「母がわたしをみごもったときから **わたしはあなたにすがって**きました」。皆さん、母の胎内に宿った赤ん坊が、**神さまにすがっている**というこの言葉を、どう理解されますか。「神さま、あなたが私のお母さんだと決めて下さったこの人が、私を本当に慈しみ育ててくれるのでしょうか。神さま、私のお母さんを宜しく導いて下さい」という、**無力な赤ん坊の必死の叫び**ではないのでしょうか。

生れて来るときに、「これから大変お世話になります」と言って、手土産を山ほどもって出てくる赤ん坊などいません。母親を泣かせながら大きな顔をして大きくなっているように見える子どもたちです。でも出てくる前に神さまに必死にすがりながら出産の時を待っている**我が子の叫び**を、この詩の作者ダビデは歌っています。このような感性を失わない時に、女性の内に**母性**が育っていくのではないのでしょうか。

[結]母の祈り

子どもたちは**神さまにすがりながら**、母の胎内で 10 ヶ月を過してきました。子どもたちには、神さまに依り頼んで生きていく**信仰心**が生まれる前から備わっているのですね。お母さんも神さまに全幅の信頼を寄せて子育てをしていくならば、我が子の心にある**神さまへの全幅の信頼**が、更に養い育てられていくでしょう。

そうしたら、あなたは自分の人生の役割りを全うしたことになります。**母の祈りは信仰の揺り籠**です。大きくなった子を、もう抱きかかえることはできません。しかし日ごとに祈り続ける**祈りこそが**、我が子にとっての**母のふところ**です。母の祈りに包まれて、子は神さまへの信頼を深めていくのです。

自分の体の内に慈愛そのものを表わす**臓器**を与えられた女性ですら、我が子を愛せなくなる時があるのですね。私たち男性はましておやです。女・男を問わず私たち人間は、**子や母すらも真実に愛せない罪**を負う者だどつくづく思います。その罪が清められて、はじめて私たちは、人と共に生きることが出来るようになるのではないのでしょうか。その罪から救って下さるために、イエス・キリストは十字架にかかって私たちが負うべき罪の裁きを、代わりに引き受けて、**罪赦されて愛に生きる命**を与えてくださいました。

愛する女性の皆さん。皆さんは**憐れみ深さ**を最もよく現す**臓器**を、神さまから与えられています。子どもがいよいよとまいとにかかわらず、女性はその生き方の中で、**憐れみ深さを表わす**ようにと、神さまは期待しておられるのです。どうぞ神さまの期待に応えて、**憐れみに満ちた世界**を造り上げていく原動力になって下さいますように。皆さんお一人お一人の上に、神さまの祝福が豊かに在りますように、お祈りいたします。

祈ります:愛の神さま、このように母の日礼拝を守ることができまして感謝します。あなたは、この私の命を先ず母の胎内で育てて下さいました。更に母のふところで、養い育てて下さいました。その恵みを感謝します。親子の絆を、私たちの思いを超えて、神さまが結んで下さったことを感謝します。子育てに労している母たちを、励まし、支え、祝福してください。老いた母たちに、感謝と喜びと平安を満たして、あなたの御許にお召し下さいますようお願いいたします。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン